

Graduation Thesis Summaries in 2020

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Department, Archaeology Kanazawa University メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00061629

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



金沢大学考古学研究室 2020 年度卒業論文概要

金沢大学 人文学類 考古学研究室

調整・技法等から見る花十字紋瓦の特徴

フィールド文化学コース
特別プログラム：考古学

東 瑞貴

花十字紋瓦は、「花十字」という十字の先端が花卉状に開く文様が施された瓦である。教会跡付近からの出土例も多いことから、教会堂やキリスト教関係施設などに葺かれたものと考えられる建築材であり、長崎を中心に日本キリスト教史と関わりのある各地において発見されている（宮下 2018）。2017年3月時点で宮下氏によって集成されている花十字紋瓦の点数は132点である。うち131点が軒丸瓦であり、残り1点は深堀遺跡の鬼瓦であるが、こちらは本研究の対象外とする。これに新たに発見されたもの等を含む6点を加えた、137点の花十字紋瓦を集成した。資料集成は、花十字紋瓦出土遺跡の報告書より集成したものに加え、2020年10月26日、27日に長崎県長崎市において調査を行い集成した。サント・ドミンゴ教会跡資料館、長崎市役所文化観光部埋蔵文化財整理所において長崎市文化財課の田中学先生のご許可のもと、勝山町遺跡・興善町遺跡・万才町遺跡・上町遺跡出土の花十字紋瓦計22点の観察、拓本、撮影をさせていただいた。本研究では長崎の遺跡で出土した花十字紋瓦を中心に、その技法や調整に着目して、分類間、遺跡間や同年代の長崎中近世の瓦と比較することで、花十字紋瓦にみられる特徴等を明らかにしていくことを検討した。分析と考察は、同範関係・法量・調整技法・瓦が葺かれた教会の4つの観点から行った。

各分類の同範関係を確認したが、基本的に同じ分類は同範であるという認識に至った。さらに遺物から製作年代を考察したⅡ B3類も同範である瓦がほとんどではあるが、瓦によっては文様等を見ると異なる範である可能性が考えられるものも見られた。Ⅱ B4類は、今回調査したものはほとんど同範であると言えるが、

1点は異なる範であると思われる。その他の分類もほとんどが同範であると考えられる。ただ、明確な特徴がない限り範型の判定は困難であるように感じられたため、そもそもの範型の製作方法にさかのぼって検討を行う必要があるのではないだろうか。

法量においては、直径・周縁幅・瓦当厚の計測を試みた。周縁幅、直径で散布図を作成し、これらをもとに、花十字紋瓦全体に見られる傾向や分類ごとの特徴を考察した。さらに瓦当厚を分類ごとに観察した。分類ごとに目立った特徴は見られず、突出して厚いものや薄いものは見られなかった。同様に、長崎近世瓦の周縁幅、直径の散布図を作成し、花十字紋瓦の散布図と比較を行った。近世瓦の周縁幅、直径は花十字紋瓦と比べて全体的にばらつきがあり、まれに直径、周縁幅が突出して大きいものも見られるが、Ⅱ B3類に近いものが多かった。また、花十字紋瓦も大きく近世瓦の法量から外れるものは見られず、散布図も重なるような形になった。瓦当厚の観点では、近世瓦には3.0cmを超えるものがある中、花十字紋瓦は最大でも2.7cmまでの厚さしかなく、全体的に小ぶりな傾向にある。これらの結果をもとに、花十字紋瓦の分類での編年を行ったが、小ぶりな瓦は年代が古いという考えと齟齬が生じてしまった。そもそも文様ごとに出土点数にばらつきがあり、また、花十字紋瓦は製作期間が短いため、このわずかな期間で製作方法に変化があったかは疑問である。

花十字紋瓦丸瓦部凹面の調整痕を観察し、コビキB・布目痕・ゴザ状痕・吊り紐痕が確認できた。コビキ技法に関しては、16点ほどにコビキBの技法が確認できた。資料は少ないものの、Ⅱ D2類以外の分類には確認されており、基本的に同じ分類は同範である可能性が高い点からも、花十字紋瓦丸瓦部のコビキ技法はコビキBである。山崎信二氏の論考においても長崎は1601年までにコビキBになった地域とされており、改めて資料を観察し、拓本をとって確認することがで

きた。同様に近世瓦で調整痕が確認できるものを集成し、比較を行った。織豊時代に主に見られた痕が花十字紋瓦に見られ、製作技術の伝播の遅れから、長崎市における瓦製作技術が周囲よりも遅れていたことが想像される。

瓦が葺かれた教会に関しては、山崎氏の教会推定地と花十字紋瓦出土地点を示した図を参考に、宮下氏の種類ごとの出土位置と教会推定地と花十字紋瓦出土遺跡の場所を示した図を作成した。教会推定地と花十字紋瓦出土地点から、資料がいずれの教会で葺かれたか、そして、山崎氏が検討を行わなかった4遺跡で出土した花十字紋瓦について検討を行ったが、推測の域を出ない。やはり花十字紋瓦の調整・技法の観点での検討をより一層行うことで新たな視点での考察が可能になるのではないだろうか。

いずれの考察も推論に頼る部分が多くなってしまったが、さまざまな観点での検討を行った。今回はセント・ドミンゴ教会跡資料館に所蔵されている花十字紋瓦の一部しか実見することができず、残りの花十字紋瓦を含め、やはりより多くの花十字紋瓦の調査が必要である。加えて、今回は報告書からの集成のみであった近世瓦も実見することが望まれる。近世瓦の調整の研究は軒平瓦が主であり、花十字紋瓦を含む近世瓦の論考があまり見られないため、この観点での研究が期待される。

今回は花十字紋瓦に主に着目したが、九州の中での長崎の近世瓦、さらには全国的な展開の中での九州の近世瓦の位置づけがより明らかになることが求められる。さらに、観察する中で丸瓦部凸面や瓦当面にも詳細が不明な痕跡等が見られたため、今後の研究で明らかになることが期待される。

参考文献：

宮下雅史 (2018) 「花十字紋瓦の二次加工と転用について」『長崎県埋蔵文化財センター研究 紀要』第8号、49-57頁。

北陸縄文時代遺跡出土の動物遺存体におけるクジラ目の同定

フィールド文化学コース

特別プログラム：考古学

今岡 蒼

縄文時代の遺跡では貝塚から、陸生哺乳類と海生哺乳類に大別される動物骨が出土しており、海生哺乳類のうちクジラ・イルカ類が出土する遺跡は限定的である。北陸地方では、出土した海生哺乳類のうちクジラ・イルカ類が大きな割合を占める遺跡が多数存在する。

本論文では、北陸地方の縄文時代におけるクジラ・イルカ漁の実態を復元することを目的とし、遺跡出土クジラ・イルカ類における種構成を考察した。

遺跡出土のクジラ・イルカ類は、遺跡ごとに骨の形態学に基づき種同定が行われているが、同定に有効な部位が欠損した骨や有効とされていない部位の骨については、詳細な種同定を行うことができていない膨大な数の資料が残されている。そのため、本稿では小竹貝塚出土環椎 65 点、上久津呂中屋遺跡出土環椎 44 点、三引遺跡出土環椎 9 点、真脇遺跡出土環椎 19 点について、形態学的特徴を分析し、先行研究との比較をすることで形態学的な特徴で識別可能な指標の再検討をした。その後、日本近海で生息が確認されているクジラ・イルカ類の現生標本 39 点について、新たな種同定の分析手法として利用されているカラーゲンフィンガープリンティング (CFP 法) に基づく種同定の手法開発を試みた。さらに、小竹貝塚出土環椎 11 点、三引遺跡出土環椎 8 点についても、CFP 法に基づいた分析を行い、形態情報と分子情報の双方からの種同定を検討した。

分析の結果、CFP 法により、日本近海で生息が確認されている現生クジラ・イルカ類について、多数の種を区別する指標が確認された。遺跡出土環椎については、CFP 法により、形態学的特徴に基づく同定結果とは異なる種の存在が示唆された。また、形態情報と分子情報を組み合わせた同定結果からは、大きさが異なるものでも同じ種である可能性が示唆された。これらの分析結果に基づき、北陸地方の縄文時代におけるクジラ・イルカ類の種構成について考察した。

末松廃寺の瓦について

フィールド文化学コース

特別プログラム：考古学

小納谷 麗奈

白鳳時代に創建された古代寺院である末松廃寺は、北陸の中核的役割を果たす寺院として重視されている。末松廃寺の軒丸瓦の主体をなす文様は、他地域に系譜を求めることが難しく、独特であり、地域色が濃厚であるということから注目された。このことから、これまで末松廃寺で数多く出土している軒丸瓦、丸瓦、平瓦の分析や分類などの研究がおこなわれてきた。加えて、末松廃寺の補修瓦を生産していたとされる、能美市の湯屋窯跡群の瓦との関係が考えられてきた。

しかしながら、軒丸瓦の文様や、出土数の多い平瓦を中心に研究がなされており、丸瓦や軒丸瓦接続丸瓦の調整から分類の再検討が必要であると考えたことから、本研究では丸瓦・軒丸瓦の凸面の調整、瓦当側面の調整から分析をおこなった。その分析を通して、創建当時に製作された瓦から、湯屋窯跡で製作された瓦までの変遷を辿ることを目的とした。また、創建当時に瓦を供給したと考えられる瓦窯と補修瓦を供給したと考えられる湯屋窯跡では製作・調整痕跡からどのような差異があるのかという点から製作集団の変化についても考察する。

調査日程は、末松廃寺の出土瓦資料を10月3日の9時30分から16時、10月7日の10時から16時、12月2日の10時から16時、12月3日の10時から12時の日程で野々市市ふるさと歴史館にて調査した。湯屋窯跡群の出土瓦資料については、11月11日の13時30分から17時に能美市ふるさとミュージアム（能美市立博物館）にて調査を行った。

調査方法は、末松廃寺と湯屋窯跡の軒丸瓦と丸瓦を観察し、報告書に掲載されている資料をはじめ、未掲載のものも含めて拓本・写真撮影をおこなった。調査の結果、末松廃寺の軒丸瓦79点、丸瓦56点、湯屋窯跡の軒丸瓦18点、丸瓦9点を分析することができた。

分類は、木立氏の分類（2009）を参考にした。軒丸瓦はA系統・B系統に分けられる。A系統は范型の補修により、3段階に分けられ、湯屋窯跡の軒丸瓦を入れると4段階となる。丸瓦は、色調や調整で分類されており、還元色系統でタテナデ・タテケズリ・ヨコ

ナデ調整の瓦が丸瓦Ⅰ類、還元色系統の赤瓦が丸瓦Ⅱ類、カキ目調整の瓦が丸瓦Ⅲ類としている。

調査した瓦にその分類をあてはめると、瓦当部は、1段階が7点、2段階が10点、3段階が18点、不明なものが11点であった。軒丸瓦接続丸瓦は、2段階が2点、3段階が9点、不明なものが22点であった。そして、軒丸瓦には、瓦当の側面や接続丸瓦の凸面に傷がついているものが存在することが観察から明らかになった。傷がついた瓦は、工具などで表面を整える目的でつけられたような傷も見られ、これらは還元色系統の瓦を生産していた工人の特徴であると考えた。湯屋窯跡の軒丸瓦はすべて第4段階であった。

丸瓦については、丸瓦Ⅰ類は、タテナデ調整が13点、タテケズリ調整が16点、ヨコナデ調整が13点を数えるが、そのうち、丸瓦Ⅱ類である赤瓦を10点含んでいる。丸瓦Ⅲ類は、ハケ目調整のものを主に調査し、12点観察した。そのうち丸瓦Ⅱ類は2点あった。木立氏の分類で丸瓦Ⅲa類である瓦は、凸面の調整の大部分が縦方向の調整であること、縦方向の調整で下にカキ目が施されている可能性があることから、本論文の分類としてはそれを丸瓦Ⅰ類に分類した。湯屋窯跡の丸瓦は、すべてカキ目調整おこなわれている。これは湯屋窯跡で須恵器生産がおこなわれていたことと関係すると考えた。

最後に、瓦当部の文様の分類と丸瓦の分類をふまえた接軒丸瓦接続丸瓦の分類から、軒丸瓦と丸瓦の共伴関係を考察した。瓦当のA系統の1段階と2段階は丸瓦のⅠ類が共伴関係にあるとした。3段階では、Ⅰ類とⅡ類があてはまると考える。4段階になると、補修瓦として丸瓦Ⅲ類が共伴であると考えた。しかし、丸瓦Ⅲ類には、湯屋窯跡では出土していないハケ目調整の丸瓦があることから、4段階と丸瓦Ⅲ類がすべて共伴であるとは限らないという点が課題である。

文献：

木立雅朗（2009）『ふるさと歴史シンポジウム いまよみがえる末松廃寺』野々市町教育委員会。

縄文時代の籃胎漆器の地域別特性と用途

歴史文化学コース日本史主履修分野

特別プログラム：考古学

滝沢香織

カゴ状に編んだ器体に漆を塗って作られる籃胎漆器は、東日本において縄文時代の後期から出現し、晩期になるとこの地域では普遍的な器物となる。本論文では、北海道から滋賀県まで、計 24 遺跡 96 点以上の縄文時代の籃胎漆器のうち、容器としての籃胎漆器である可能性が高い 20 遺跡 85 点を集成した。これらに用いられている編み方や出土位置から地域的な傾向を見出すことで、籃胎漆器の特徴や用途を検討している。籃胎漆器に用いられている編み方に関しては、他の縄文時代晩期の編み物における地域的特徴と重なる点が多いと考えられるものの、編み方のわかる資料数が限定されていることから、今後より多くの科学分析を行う必要があると考えられる。また籃胎漆器の出土位置を見ていくと、東北北部においては土壙墓や墓域周辺の廃棄遺構からの出土がみられ、新潟県寺地遺跡では祭祀関連施設と考えられる配石遺構からの出土が確認できた。一方、関東地方においては水場遺構周辺での出土が多く、石川県においては堅果類出土土坑周辺からの出土が確認できた。これまで籃胎漆器の用途として、祭祀用具説、副葬品説、実用品説が考えられてきたが、籃胎漆器はすべての地域において同じ用途で使われてきた訳ではないと考えられる。籃胎漆器は、縄文時代晩期の人々にとって地域の文化の一部であり、身近な器物であった可能性がある。

縄文時代土製仮面分類の再検討

フィールド文化学コース

堀内 健太郎

縄文時代の遺物には、土偶や石棒のように、一見しただけでは機能や用途が判然としないものが存在する。これらの遺物は祭祀や呪術といった、縄文人の精神活動に関係していたと考えられることから、生産活動に直接貢献していた弓矢や石斧などの狩猟具、石皿・土器などの厨房具といった「第一の道具」に対して、「第二の道具」と呼ばれている。

土製仮面もそうした「第 2 の道具」の 1 つである。日本国内では土製仮面の可能性があると考えられる資料を含めると現在までに 80 遺跡 166 点が確認され、今も出土が相次いでいる。過去には土製仮面の形態や意匠に着目した研究者によって何度も分類案が設定され、磯前順一の分類案と型式編年によって土製仮面研究の大枠が設定された。しかし、形態分類に関しては過去の分類案では想定されなかった類型の資料も散見されることから、それらも含む新たな分類案の構築が求められる。

本研究では、そうした課題を踏まえ、目孔の有無、大きさ、紐孔の有無の 3 要素からなる分類案を設定した。大きさは完形時における縦長・横幅のいずれかが 15 cm 以上と推測できるものについて大型、それ未満のものを小型とした。以上の 3 要素を組み合わせた 8 類型に加え、多くの研究者によって土製仮面の 1 種と位置付けられる部位形土製品も含めた 9 つの類型に分け、この分類案を基に、今回の研究で集成した 75 遺跡 155 点の資料を対象として分類を行った。そして、その結果から出土地と類型に対応した分布図を作成し、土製仮面の形態の変化やその用途の変化についての考察を行った。

分析の結果、土製仮面は後期初頭に西日本の近畿や四国地方を大型で目孔のある仮面として出現し、分布域を東漸・北漸しながら移動する。また、移動の過程においては地域ごとでは特定の類型が集中する傾向にあることが判明した。

晩期に入ると東北地方北部を中心に分布するようになり、西日本から土製仮面は姿を消すが、岩手県以北の地域では遮光器型土面と呼ばれる意匠を持つ小型の仮面が各地で出土する。それらの特徴は東北以外の地

域にも波及し、東北以外の地域で出土した晩期の土製仮面には遮光器型土面の特徴を持つ個体も多い。

仮面の用途に関しては Dall の 3 類型に当てはめて考察した。当初は被り仮面としての使用も可能な A 類仮面が中心であったが、土製仮面が小型化し、実際に顔に被ることのできない大きさへと変化する様子から、仮面文化が移動に伴って変容していることがわかる。

参考文献：

Dall, W. H. (1882) On masks, labrets, and certain aboriginal customs, *Annual Report of the Bureau of Ethnology to the Secretary of the Smithsonian Institution*, vol. 3: pp. 31-34.

日本出土盤龍鏡とその傾向からみる鏡の流通

フィールド文化学コース

特別プログラム：考古学

宮田 和希

鏡は古くから呪術的な力を有すると広く信じられてきた。鏡にモノが“映る”という現象を、昔の人々は単なる光の反射ではなく、神秘的なものと捉え、祭祀の道具として重視していた。弥生・古墳時代の遺跡から多く出土する銅鏡。日本における銅鏡研究の多くは三角縁神獣鏡についてのものであるが、当時の鏡の分配・流通について論ずるには、他の鏡式についての検討も極めて重要であると考えられる。

本研究では、後漢代から製作が始まり、その後の魏晋南北朝時代、日本においても模倣製作がなされた盤龍鏡に焦点を当て、その流通傾向を見出すことを主目的とする。筆者が調べた限りでは、日本出土の盤龍鏡集成が行われていないことから、図や外区文様などのデータを含む集成表の作成を副目的とする。対象となったのは、26 府県 70 遺跡出土の 72 点である。集成した資料を外区文様をもとに分類し、遺跡の時期区分ごとの分布図を作成や墳形ごとの出土数の計測等を行った。墳形ごとの出土数は円墳、前方後円墳が 19 遺跡、前方後方墳が 6 遺跡。方墳が 4 遺跡、帆立貝式古墳と祭祀跡は 2 遺跡づつ、不明が 18 遺跡となった。時期区分ごとの出土数は、前期が 36 点、中期は 17 点、後期が 2 点、時期不明が 17 点である。

分析の結果、円墳と前方後円墳に偏在傾向がみられることや、時期が下るにつれて数が減少してきていることなどが明らかになった。墳形ごとの絶対数の差を考慮する必要はあるものの、他の墳形と三倍以上の差を有することから、有意な傾向とできるだろう。また古墳前期における東日本側での出土地は、新潟県城の山古墳や群馬県頼母子古墳などの、当時のヤマト政権の勢力圏の東端、あるいは勢力圏外ともいえる地域から出土していることが分かった。

被葬者の地位がさほど高くない円墳から多く出土していることや、対外政策上の要地であった北部九州、政権と蝦夷の勢力圏の境界領域ともいえる地域から出土していることから、盤龍鏡の分配の条件のひとつは、対外政策上の要地であることではないかと考えられる。今回の研究では、三角縁神獣の分布傾向としか

比較を行うことができなかつたため、上記の分布傾向が盤龍鏡独自のものなのか、多くの鏡式で当てはまるものなのかを確かめるために、他の鏡式の分布傾向との比較が必要であると考え。

石川県の貯蔵穴について

フィールド文化学コース

森島 康太

本稿では石川県の貯蔵穴を集成し、その時期ごとによる特徴を大きさと出土堅果類の2つの観点から分類し考察した。15遺跡から227基の貯蔵穴を集成し、58基の貯蔵穴の大きさを簡易計測した。その結果、後期・晩期に推定される貯蔵穴は西日本の低地型貯蔵穴と大きさはほぼ変わらないものの、弥生時代と推定される貯蔵穴は西日本のそれと比べて明らかに小形化していることがわかった。

また、102基の貯蔵穴から出土した堅果類を分類したところ、縄文後期末から晩期にかけてはアカガシ亜属の堅果類の出土数が比較的多く、これは西日本の低地型貯蔵穴と同様の傾向を示しているものだといえる。さらに、トチノキが縄文時代前期初頭以前から弥生時代中期後半にかけて断続的に出土していることから、石川県ではトチノキが主要な貯蔵対象であったのではないかという推測を立てた。

今後完形の貯蔵穴の資料が増えれば、本稿でとり上げることができなかつた縄文前期・中期の貯蔵穴の形態や後期・晩期・弥生時代との比較もしやすくなるのではないかと思われる。